

安心と満足のブランドづくりに挑戦する

小山株式会社 奈良県奈良市

奈良を本拠地として寝具などのリース事業を行う小山株式会社。ホテルや寮、病院などへの寝具などの貸し出し、介護用品のリースを中心に全国に事業展開している。

老舗企業が破綻する例が後を絶たないご時世だが、創業して1世紀を超える超長寿企業だ。常に時代にマッチした顧客ニーズを掘り起こし、業容の拡大を図ってきた。業者間の競争が熾烈さを増すなか、同社は勝ち残りのためのブランドイメージづくりにチャレンジしている。

会社概要



会社名：小山株式会社
 所在地：奈良県奈良市西木辻町88
 電話：0742-22-4321
 創業：1893年4月
 設立：1962年10月
 資本金：2億3400万円
 代表取締役社長：小山 新造
 従業員：573名
 事業内容：一般向け・医療福祉施設向け寝具類のリース、介護用品のリースなど
 URL：<http://www.koyama-kk.co.jp/>



本社内工場

公共工事といっしょに成長

小山株式会社の創業は1893年（明治26年）。京都伏見の綿商・貨物商「綿喜」を営む小山家の三男・榮三郎氏が分家独立したのが始まり。後の1897年に「綿喜」奈良店の営業権を譲り受けて以降、奈良の地を商売の本拠地とすることになった。

会社は日本の建設工事現場とともに歩んできた。日清・日露戦争後の鉄道建設ラッシュに始まり、戦後の黒部第四ダムや水力発電所、名神・東名などの高速道路、東海道新幹線、1970年の万博など、大規模建設工事があれば、そこへ営業所を設け、工事現場の宿舎に布団などを貸し出した。特に、ダムや水力発電所などは人里離れた山の中がほとんど。「欲しい」と言われれば冷蔵庫やテレビなどお客様の欲しがるものは何でも用意したという。そして、その営業所を拠点に地域の他の工事現場や施設にも貸し出し先を広げていった。

「建設工事のあるところ小山あり」といわれ、日本各地27か所にネットワークを広げ、営業網を拡大させてきた。工事現場のほか、研修施設、ホテル、野球場や大相撲の観客席の座布団、大相撲地方巡業部屋の布団などにも貸し出してきた。

病院寝具リースに進出

「建設工事以外に、布団を大量に貸し出しできるところはないだろうか」。60年当時の会議で問



業務用寝具

題になった。建設工事に頼るだけでは会社は成長できない。そこで目をつけたのが、病院だった。

ところが、当時は規制があり、病院で使用する布団やシーツなど寝具類はすべて自前で用意し、洗濯、消毒などを行わなければならなかった。同社は県や厚生省（当時）に積極的に働きかけ、翌61年に病院への寝具リースが業界のトップを切って認められることになった。

ブランドイメージをつくる

以後、病院への寝具リースを拡大させ、75年には契約病床数が5万床まで成長。しかし、この頃になると新設病院数の減少に加えて、新規参入業者の増加もあり、同業者間の競争が激しさを増してきていた。

同社は寝具リースに付随して医師や看護師用の白衣、入院患者用の病衣（寝間着）の貸し出し、さらには病室のカーテンなどの貸し出しも始め、商品の多角化を図っていった。



病室用カーテン

1994年には医療制度改革の一環で入院患者の寝具は保険点数の計算方法が変わり、寝具費は医療・介護施設側からコスト削減の対象となった。「当社は単に価格だけではなく、お客様の多種多様なニーズを満たした商品・品質・サービスの提供に努め、ブランドイメージを守り育てていきたい」と小山社長は強調する。

医療機関は機能によって特定機能病院、地域医療支援病院、一般病院などに分けられるが、同社では、高度医療を受け持つ特定機能病院から介護施設、保育所に至るまで幅広いお客様に採用されることでブランドイメージを高めたいと考える。

また、昨年からは、細菌等の感染を防ぐため、病院での使用前と使用済みのシーツなどを分ける「分別集配」を業界で初めて導入した。配送トラックの見直しに加えて手間もかかる。「当社の扱っている製品は人の健康、生命に関わるもの。コストや手間を惜しむことはできない」。ブランドづくりに懸ける同社の決意表明でもある。その一方で、在庫管理の効率化や損益管理の充実、人件費の引き下げなどコストダウンも進めている。

こうした努力が実って、いったん離れたお客様が値段が高くてもまた戻ってくるという。



在宅介護用品ショップ「カインドハウス」（奈良市）

利益の出ているうちにチャレンジ

就任して約1年になる小山新造社長は創業者榮三郎氏から数えて6代目に当たる。40年近く在籍した銀行時代の経験を生かして、現在、新生「小山」づくりに専念している。「利益の出ている今こそ厳しさをもってチャレンジするチャンス」と経営の手綱さばきは明快だ。1世紀以上の「小山」の歴史にさらに新たな1ページが刻まれようとしている。（井阪、島田）